



自分自身を受け入れること : 『フィービー・イン・ワンダーランド』 : (原題 : Phoebe in Wonderland) (2008年)

著者	嶋村 安祐美
雑誌名	映画で学ぶ《教育学》
号	4
ページ	14-15
発行年	2014-12
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124144

自分自身を受け入れること

嶋村 安祐美（筑波大学人間学群教育学類／教育制度学）

フィービー・イン・ワンダーランド

（原題：Phoebe in Wonderland）

- ◆ 種別：DVD（映画）
- ◆ 監督：ダニエル・バーンズ
- ◆ 製作年：2008 年
- ◆ 製作国：アメリカ合衆国
- ◆ 発売／販売元：アクセスエー
- ◆ 販売協力：アメイジング D.C.
- ◆ 時間：本編 101 分
- ◆ 音声：オリジナル英語／日本語吹替
- ◆ 字幕：日本語字幕／日本語デカ字幕



© 2008 Phoebe in Wonderland, LLC. All rights reserved.

あらすじ

フィービーは、普通の子とは少しだけ違う。新学期が始まり、学校の演劇で『不思議の国のアリス』をやることになった。どうしてもアリスをやりたいフィービーは、アリスになるため、アリスをクビにされないため、正しい順序で庭を一周したり、階段をジャンプしたりしはじめる。それを見かねた両親はフィービーを病院へ連れていくが、問題行動は悪化していった。やがて両親はフィービーがトゥレット症候群という病気であることを知り、受け入れてゆく。フィービーは学級で自分の病気の説明をし、アリス役への挑戦を続ける。

シーン再現

＜フィービーは演劇でうまくいかず、友人の悪口をつい言ってしまい、舞台を抜け出し、舞台上の通路に駆け上がる。すると、笑い声が聞こえる＞

フィービー：（暗闇に向かって）やっと一戻ってきてくれた。何？ それドジャー先生の口癖よ。（通路の下を覗くと、トランプに乗ったアリスが笑っているのが見える。）分かった。いくわよ。

（フィービーは通路から飛び降りる）

Chapter

1. 少しだけ違う／10'50
2. アリスになってみせる／13'26
3. おとぎの国へようこそ／5'37
4. クビはイヤ／10'26
5. わからないの／6'38
6. 犯人は誰？／5'20
7. わざとじゃない！／10'27
8. 助けてほしいの／5'23
9. 母の苦悩／3'16
10. 希望はどこにある？／8'51
11. やめないで／4'09
12. 私の病気／5'00
13. 幕開け／5'52
14. エンドクレジット／4'51

※ チャプタータイトルがないため、内容に合わせて筆者が設定した。

主人公のフィービーは、トゥレット症候群を発症した。トゥレット症候群とは、運動障害の一つで、運動チックと音声チックが複数起こる病気である。また、注意欠陥、多動、強迫症状を引き起こす場合が多い。フィービーの場合、人に唾を吐く、人の言った言葉をオウム返しに言う等の症状の他、強迫症状も描かれている。クラスメイトに唾を吐いたために両親が学校に呼び出されたり、特定の行為が止められない強迫症状により怪我をして両親に悲しまれたり等、家族からも理解されずにフィービーは苦しんでいた。そして、現実逃避として「おとぎの国」の幻覚を見るようになる。

フィービーは、わざとじゃないけれど問題行動をしてしまう自分を「ダメな子」と表現した。演劇のドジャー先生はそんなフィービーに対して、次のように語る。「ある時期が来たら…人生の大半が過ぎたころ一目を開いて—自分が何者か見極めて。他人とは違った所を探すの。普通じゃない所を。そして言い聞かせて。“これが本当の私”。この言葉には—愛があるから」(Chapter 7)。ドジャー先生は、フィービーを否定することも肯定することもなく、そのままの存在を受け入れた。先生の言葉に支えられながら、フィービーは少しずつ自分自身を受け入れていく。

その後、自分が病気であることを知ったフィービーは、クラスでトゥレット症候群について説明した。「ジル・ド・ラ・トゥレット症候群。かわいい名前よね。私の病気です。…(中略)…声が聞こえるんです。ダメなことをやれって。ルールを破れと。でも、それが正しいときもある。そう思うとラクです」(Chapter12)と。フィービーは自分の病気と向き合い、問題行動を起こしてしまう自分を受け入れることができた。フィービーはもう、「おとぎの国」に頼らなくても、生きていけるはずだ。

いつの時代の子どもにも、成績や人間関係等、様々な悩みがあるだろう。中には、フィービーのように、自分の存在をも否定するほど苦しむ子どもたちがいる。そんな子どもたちにとって、ドジャー先生のように、自分自身を受け入れてくれる他者の存在は重要である。それは、家族でも、友人でも、先生でも良い。しかし、他者から受け入れられることは重要でも、実際に苦しんで自分の存在を否定しているのは、その子ども自身であることを忘れてはいけない。フィービーの場合、ドジャー先生に受け入れられていながら、自分自身を受け入れることができずに舞台上部から飛び降りて怪我をしてしまった。結局は、自分自身をいかに受け入れられるかで、現実の見方が変わってくるのではないだろうか。

子どもたちが、自分の力だけで自分自身を否定するほどの大きな苦しみを乗り越えることは難しい。だからこそ、誰かの力が必要である。他者に受け入れられたという経験が、この苦しみを乗り越えるための一つの力となるだろう。

Information

【参考文献】R. ブルーン／B. ブルーン（訳：赤井大郎／高木道人）『みんなで学ぶトゥレット症候群』星和書店、2003年

※トゥレット症候群を医学的見地から書いた本。一冊を通して、ある1人の男の子の経過を追う構成になっている。

希望
つ
て
ど
こ
に
あ
る
の
？